

中途障害者にとってのスポーツの意義 ースポーツ社会化の視点からー

福元 威耀 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)
指導教員 河西 正博

キーワード：スポーツ社会化，中途障害，障害受容

1. 緒言

藤田 (1996) よれば，スポーツ的社会化には「スポーツへの社会化」と「スポーツによる社会化」の2側面がある。「スポーツへの社会化」はスポーツ活動に参加していく過程そのものに着目し，「スポーツによる社会化」はスポーツ活動に参加することによって生じる人格形成の過程に着目する。スポーツ社会化において「スポーツへの社会化」の研究は多くみられるが，「スポーツによる社会化」の研究は少ない。障害者スポーツにおいては，当事者の障害種別や程度は様々であることから，障害受容を含めた「スポーツによる社会化」の検討が重要であると考えられる。そこで本研究では，スポーツによる社会化の視点を加味して，中途障害者アスリートの事例から中途障害者がスポーツを行う意義について検討することを目的とする。

2. 研究方法

中途障害をもつ車椅子バドミントン選手 (Aさん) に対象に半構造化インタビューを行った。

【主な質問項目】

- ・受傷直後から現在の障害意識について
- ・スポーツ活動について
(受傷前，受傷後，現在の取り組み)

3. 結果と考察

障害受傷前は特定のスポーツにこだわって取り組んでいたわけではなく，障害受傷直後はスポーツをやるなんて思っていなかったと述べており，スポーツの事よりもまずは，仲間のいる大学に戻ることが一番の目標となっていた。このことから，Aさんが再びバドミントンを始めるにあたり，仲間の存在が大きかったといえ，バドミントンサークルの仲間は「重要な他者」であったといえる。すなわち，障害受傷前のバドミントン経験がそのまま車椅子バドミントンへ向かう直接的な動機になったのではなく，友人の存在が車椅子バドミントンと出会わせたとと言えるのではないだろうか。

また，競技を始めてからすぐに車椅子バドミントンを競技的に捉えられたわけではなく，受傷前の自分と比較してしまい，「できる自分」

と「できない自分」との葛藤を抱えながら車椅子バドミントンプレイヤーとして社会化していき，現在は世界トップレベルの選手になっている。障害受傷前のAさんはバドミントンがすべてという取り組みをしていなかったため，車椅子バドミントンを「新しい競技」として取り組むことができたのではないだろうか。トップレベルではなかったからこそ，スポーツに対する意識が変化し，現在の地位を築けているものと考えられる。

Aさんは，スポーツに関して，心身にとってもいいものだと述べている一方で，スポーツをする際の排尿・排便等の管理について，障害を負っているからこそ苦労していると述べている。スポーツに積極的に取り組めば取り組むほど，その一方で障害がストッパーとして立ちだかるということから，スポーツへの社会化が進めば，時にはスポーツによる社会化が止まるといったように，社会化の両面が複雑に関連しながら，Aさんのスポーツ社会化は進展しているといえることができる。

4. おわりに

Aさんの事例から，中途障害者のスポーツ社会化は，スポーツへの社会化とスポーツによる社会化が相互に関係し合いながら進展していることが明らかになった。本研究は，スポーツによる社会化も視野に入れ，本人の障害意識など内面的な部分を含め詳細に検討することができた。障害者スポーツに参加する当事者の障害は多様であり，それぞれの障害意識も多様である。このことから，「スポーツによる社会化」を視野に入れたスポーツ社会化研究の必要性を指摘することができる。

本研究の課題として，一事例のよる考察に留まってしまったため，中途障害者のスポーツ社会化過程の一般化が困難であった点が挙げられる。

引用・参考文献

藤田紀昭 (1996) 身体障害者のスポーツ社会化研究の視点. 研究紀要. 95 (101) : 248-228.